

数日後、カールスルーエの母がヴァルターの大好きなバームクーヘンやシュネーバル(ドイツの揚げ菓子)をいっぱい送ってくれた。御礼の電話を入れた際、海での出来事を話すと、母がおもむろに言った。

「地上に生きることは、かいのあることだ。ツアラトウストラと共にした一日、一つの祭りが、わたしに地を愛することを教えたのだ。『これが――生だったのか』わたしは死に向かつて言おう。『よし！ それならもう一度』と」

グンターがはっと顔を上げると、母はさらに暗誦を続けた。

「おまえたちがかつて『一度』を二度欲したことがあるなら、かつて『おまえはわたしに入った、幸福よ、刹那よ、瞬間よ』と言ったことがあるなら、それならおまえたちはいつさいのこの回帰を欲したのだ。おまえたち、永遠な者たちよ、世界を愛せよ、永遠に、また不断に。痛みに向かつて『去れ、しかし帰ってこい』と言え。全ての悦楽は――永遠を欲するからだ」

母は、居間の書架から一冊の古びた本を取ってくる、背表紙をカメラに近づけた。

《Also sprach Zarathustra(ツアラトウストラ)》²⁹

「あなたは最後まで読んだことがなかったでしょう。中学生の頃、最初の数ページを繰っただけで、『僕、こういうのは苦手だ。くどくどと、うるさい感じがする』とすぐに書架に戻してしまっただけ。ワーグナーが好きなら、いつかこの本にも手を伸ばすだろうと期待してたのだけ」

「すっかり忘れてたよ」

「そうね。あなたも読まないし、お父さんも読まない。ミュンヘンの家族もほとんど興味がない。唯一、愛読していたのは巨人族のお父さま。つまり、あなたのお祖父さんよ」

「意外だな。僕の記憶では、政府の機関紙やビジネス誌ばかり読んでいた記憶があるけど」

「そうね。お年を召してからは、実用的な読み物ばかりだったものね。でも、私がかここに嫁いできた時、どうしてだか居間の本立てにあったの。お好きなんですか？ と聞いたら、『若い時にな』って。なんだか気恥ずかしそうだったから、それ以上は聞かなかったけど、相当入れ込んだ時期があったんじゃないかしら」

「我が家では忘れ去られた書物なんだね」

「皆がそれぞれに幸福で、生きる知恵に長けていたからでしょう。あなただって、そこまで自己探求したことはないはずよ。哲学や自己啓発の本を読み漁ることもなければ、創作や思索に耽ることもない」

「高校の時、父さんと喧嘩したぐらいいだよ」

「でも、ヴァルターは違う。多言語の環境に育って、ドイツ名のオランダ人。両親も地元の人ではないし、子供にとっては辛いハンディもある。自分だけ皆と違って、どこの誰でもないような疎外感を覚えるのですよ。口に出さなくても、自分は何ものか、どうすれば周りに認めてもらえるのか、ずっと心の中で考えているはずよ」

「僕はどう力付ければいい？」

「この本に書いてあることを教えてあげればどうかしら。魂の幸福とは、自身を肯定し、生きることを悦ぶ気持ちだよ」

「自身を肯定し、生きることを悦ぶ……」

「あなたは以前からあの子の言葉の問題を直そう、直さなければ大変なことになる、と躍起になっている。その気持ちは理解できるし、訓練次第で改善するのも本当でしょう。でも、直らないからといって、あの子

の価値が半減するわけじゃない。肝心なのは、受け入れること。言葉に不自由しようが、周りに誤解されようが、『それでよし!』と思える気持ちでしょう」

確かにその通りだ。

たとえ言葉の問題を克服しても、周りから見比べて「駄目だ」と落ち込むようでは、魂の幸福など永遠に訪れない。

「でも、どうやって教えればいい? 僕でさえ自身自身を肯定するのは難しい。いつもこれで良かったのか、他にもっとやりようがあるんじゃないかと落ち込んでばかりだ。こんな状態で、あの子に肯定の気持ちなどを教えられるわけがない」

「あなた、自分の仕事はどの? 上級技師の資格試験を受けると言って、まだ受けてないの?」

「そんな余裕はないよ。スピーチセラピートの送り迎えに水泳教室、散歩にサツカー、図書館の読書会、夜はあの子の勉強を見るのに精一杯だし、土日もいろんな遊びを考えて、あの子を楽しませて……」

「驚いた。それじゃあ、自分の時間など一分もないじゃないの。朝から晩まであの子にくっついて、面倒ばかり見ているの?」

「だって、今が一番大事な時期だし、僕かアンナが側に付いてないと、すぐに心が塞いで、閉じこもってしまから」

「気持ちとは分かるけど、それではあなたもアンヌさんも気持ちが悪くしてしまうでしょう。あの子の面倒を見るのを心底楽しんでいたらともかく、あなた方だって、多少は負担に感じているのでしょ」

「……」

「たまにはアンヌさんと二人で食事に出かけたり、ドレスアップして劇場に出掛けたり、自分たちの人生も楽しんでどうなの」

グンターはここ数年、遊びらしい遊びも体験した事がないのに気付いた。夫婦で出掛けても、学校だったり、スピーチセラピーだったり、真ん中にはいつもヴァルターがいて、それ以外の娯楽など考えたこともない。

「子供は親の幸せそうな姿を見て、人生の楽しみ方を学ぶのよ。あなたが自分に懐疑的で、迷ってはかりなのに、どうしてあの子に肯定の気持ちを教えられるの？ このまま上級試験も受けず、第二次デルタ計画に参加する目標も達成せずでは、それこそ本末転倒じ

やないの。この本も送ってあげるから、少し自分たちの生き方を見つめ直してごらんさい」

数日後、母から本が届き、グンターは寝床の中でページずつ読み始めた。

いつもベッドに入る頃にはくたくたで、読書する余裕もなかったが、数分でも本に触れると、ずっと忘れていた感覚が心に蘇ってくる。

《わたしはあなたがたに超人を教える。人間とは乗り越えられるべきものである》

《人間において偉大な点は、かれらがひとつの橋であって、目的ではないことだ。人間において愛しうる点は、かれが過渡であり、没落であるということである》

《創造——それは苦悩からわれわれを解放する大いなる救いであり、生の軽快化である。だがまだ、創造する者が生まれ出るために、苦悩と多くの変身が必要なのである》

《創造する者とは、人間の目的を打ち立て、大地に意

31 味と未来を与えるものである」³⁰

グンターはいつしか自分自身が夢中になっていた。学生時代、この本に見向きもしなかったのか不思議なくらいだ。

『生を肯定する』

このシンプルな諦観が、人によっては何故こうも難しいのか。

人は誰でも自分が好きで、自分第一という印象があるが、「自己満足」と「肯定」は違う。肯定は、自己にとどまらず、全てを包括した「よし！」の気持ちだ。自分の未熟さも、身を切るような不運も、ありのままを受け入れ、愛おしむ。「よし！」と思う気持ちがなければ、何を得ても虚しいし、失敗すれば不幸にしか感じない。

逆に、どれほど周囲に劣っても、思う通りに生きられなくても、心の底から『よし！』と思えたら、生そのものを楽しむことができる。

『だから、ヴァルター。皆と違って、上手く出来なくても、君が心の底から『これが生だったのか。よし、それならもう一度！』と思えたら、それが本当の幸福

だ。辛いことがあっても、これが自分の人生だと胸を張って生きられるようになる』

『もう一度、何をするのか？』

『生きることだ。ewig wiederkehren（永劫回帰）といって、同じ自分、同じ人生を、何度生きてもいいと思えるくらい、この生を愛して悦ぶ気持ちだよ』

『ewig wieder... 難しくてわかんないよ』

『じゃあ、こう言おう。Der Ring der Ewigkeit『永遠の環』だ。たとえば、太陽は海の向こうに沈んでも、また昇って輝きたいと願う。それは太陽である自分自身を悦んでいるからだ。それと同じように、君もこの人生、同じ自分を何度生きてもいいと思えるようになれば、心の底から幸福を感じるようになる』

『俺が何度も生きるの？ そんなのイヤだよ、俺、早く死にたいのに』

『そうじゃない、ヴァルター。俺が何度も生きるんじゃない。何度生きてもいいと思えるほど、自らの生を悦ぶという意味だ』

『悦ぶ』って、どうやって？ 毎日、バームクーヘンを食べるの？』

『やっぱり君には難しすぎるかな。じゃあ、こうしよ

う。これからお父さんの言うことをしっかりと頭の片隅にメモするんだ。今は意味が解らなくてもいい。丸ごと暗記して、折に触れ思い出して。そうすれば、いつかきつと人生の助けになる。『グンター・フォーゲルもかく語りき』だ。世界で唯一、君のための哲学書だよ」

それからグンターはいろんなことを語って聞かせた。創造とは。人生とは。運命愛とは。

ヴァルターは聞いているのか、いないのか、退屈そうに砂に絵文字を描いたり、ぼんやり海を眺めたり、水面に小石を投げたり。時にはあくびをしながら、英語やオランダ語で独り言を言ったりもする。それでも息子の頭にひたすら書き付ける。いつの日か、それが人生の導き手となるように。

「ヴァルター、どうか忘れないで。生きるということとは、一つの魂の経験だ。周りがどう思うかは問題じゃない。自分でどれだけ納得できるかだよ。命ある限り、人は何かを為すチャンスを与えられる。そして、人生は一度きりだ。どんな時も、自分で納得がいくように、精一杯生きてごらん。そうすれば、思う通りにならないことも、辛いことがいっぱいでも、生に感謝するよう

になる。いつの日か、君が昇る朝日に両手を広げ、「これが生だったのか。よし、それならもう一度」と言えたら、それが僕と君の魂の幸福だ」